

平成22年 5月 25日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520277
 研究課題名（和文）都市の食卓—ドイツ近現代文学から探る飲食儀礼と変容する都市空間
 研究課題名（英文）Food rituals in modern and postmodern urban civilization on the basis of German literature

研究代表者

柏木 貴久子 (KASHIWAGI KIKUKO)

関西大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70411494

研究成果の概要（和文）：様々な相互作用の中で起こる文化事象を、文学研究と文化研究の融合を目指すという立場から分析する本研究では「食」という対象に光をあてた。近現代における人々のメンタリティや審美観、行動様式の変化は、とりわけ都市という空間に特徴的にあらわれ、両者の変容は連動している。ドイツ文学作品を題材に、社会的環境を考慮しつつ飲食儀礼、すなわち文化的に形成された、飲食にまつわる行動に着目した本研究は、グローバル化が進む時代への考察に寄与する。

研究成果の概要（英文）：I major as a Germanist in intercultural studies – a fusion of literary studies and cultural studies, throwing an objective light on ‘food’. Food rituals in modern and postmodern urban civilization is to investigate the relationship between the changes resulting from urbanization and those of the deeds, symbolism, mentality and aesthetics surrounding ‘food’, mainly on the basis of the reading of literary works. My research of this is worthy of attention and it contributes to the understanding of the changes to the social environments in the age of globalization.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：ドイツ文学、ドイツ文化、ヨーロッパ民俗学、都市小説

1. 研究開始当初の背景

文化実践としての飲食事象に着目し、これを都市という空間において考察する本課題設定の背景にあったのは、一般的な食への興味の高さにもかかわらず、「文化研究としての文学研究」という立場からみたとき、詳細な理論的分析をふまえた「食」へのアプローチが少ないという状況であった。このような研究テーマを取り上げた先行研究としては、Thomas Mann (1875-1955) の作品を扱った Alois Wierlacher, Michael Köhler が挙げられる。ヨーロッパ文化の相続者および伝達者としての自意識が極めて強く、食に関し多くの記述を残した作家の作品について、前者は食の類型化、後者は供物に関する哲学的考察に重点を置いて論じている。これらに続き、飲食儀礼（文化的に形成された実践一般という広義の意味での儀礼）を通じての意味生成の過程を詳細に分析するものとして、拙著 *Festmahl und frugales Mahl. Nahrungsrituale als Dispositive des Erzählens im Werk Thomas Manns.* (2003) がある。ここにおいて、日常生活の周縁に見られる飲食儀礼とキリスト教、ギリシャ・ローマ文化、哲学といったヨーロッパの伝統とが深く関連していることが明らかになったが、この結果をふまえ、さらに社会的背景との関わりを大きく視野に入れる研究が必要であると考えられた。そこで、都市を舞台として繰り広げられる食の情景を取り上げる本研究課題が計画された。なぜなら都市は社会のダイナミズムの中心であり、人々の思考と言動の変化が範例的にあらわれる空間だからである。さらに、都市文学研究において、都市における飲食儀礼という観点が出ていないという状況があったので、ここから興味深い文化実践の事例が見出されると考えられた。

2. 研究の目的

人文学、とりわけ外国語の言語文化圏を対象とした学問分野において、文学作品を扱うこと自体を軽視する傾向が強まっているようである。しかし、作品を一種の民族誌として捉えるならば、そこには人々の行動様式、メンタリティ、審美観、そして社会状況について多くの情報を読み取ることができる。近代以降現在に至るまで、グローバリゼーションがますます進展し、それと同時に文化の多様性がますます意識される時代において、文化事象に関する研究は、文化理解を助ける領域として重要性を持つ。文学研究も、文化を意味の織物であると捉えるとき、意味の解釈作業を得意とするその特性を武器に、これに

貢献できるはずである。本研究は、「文化研究としての文学研究」の確立と強化に寄与しようとするものである。

文化事象の捉え方は様々であるが、一般的関心の高さに反し、理論的分析が不足しているのが食という分野である。食紀行にとどまらず、詳細な理論的分析をふまえて文化形態をひも解いていこうとする研究は不足している。この間隙を埋め、「飲食」という視点からの文化研究を発展させようとする本研究は、ドイツ近現代文学を契機に、社会との関連を重要視しながら、文学テキストにあらわれた飲食儀礼を文化実践のひとつの形式として分析する。そして社会的背景ならびに意味との関連をより明確に探るために、社会のダイナミズムが凝縮してあらわれる「都市」という空間を選ぶ。本研究は文学テキストを通じて、都市の発展という外的変化のなかで、都市生活者の行動様式、意識、審美観はいかに変化するのかを明らかにしようとするものである。

(2) 内容に関する方法：変遷をたどるにあたり、19世紀末から20世紀初にかけての世紀転換期、二つの世界大戦の間、第二次大戦後以降を三つの時代区分とした。それぞれを1)ハンザ都市の没落とあらたな世界都市の出現、2)一次大戦後の復興、「黄金の20年代」における大都市の発展、3)破壊と復興、瓦礫からの都市復興と再生の時代と捉え、当該時代に書かれた作品を分析解釈の対象とした。

3. 研究の方法

(1) 研究作業の履行手段：文献収集、現地視察、発表という三つの方法をとった。一次文献の文学作品と哲学的・文学的理論書から都市論、ガストロノミーにまでわたる多様な二次文献による文献分析のほか、対象となる都市を知るために現地に赴いた。作品当時と現在、さらに昨今の急激な都市変化を考慮しつつ、テキストにあらわれた描写の痕跡を探り、メディアに記録。また現地では、発表と学会参加を通じて、意見交換の機会を持った。

4. 研究成果

19世紀末から20世紀初にかけての世紀転換期においてみられる都市の興亡が示すのは、前近代的構造を残すゆえに後退する都市と、鉄道という新たな移動性を基に世界的都市へ発達する都市との対照性であった。これをトーマス・マンの『ブッデンブローック家の人々』、『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』

に見た。ハンザ都市リューベックを舞台とした前者では、都市とともに旧態然とした商家が没落し、そのプロセスが、徐々に解体する家父長的な家族の食事形態に呼応する。またフランクフルトからリスボン、さらにパリといった世界都市へと舞台が移行していく後者では、家父長的な家族制度から抜け出し、個人としての“出世”を追求する主人公を通して、都市における新しい生活形式が浮き彫りになる。都市の衰勢と世帯の変化が同時進行しているのである。すなわち都市シングルの出現であるが、これはまさにホテル、レストラン、バー、カフェなど都市型ガストロノミーの発達によって推進されており、彼らのコミュニケーション形態、生活リズムは都市型ガストロノミーに大きな影響を受ける。さらに都市を舞台にした小説においては外食のシーン、そこでの振舞いが駆動点として機能していること、19世紀末からの都市部における外食産業の発達はメディアの発展と深く関わること、食べる場としての都市建築も大きな役割を演ずることが明らかになった。

世紀転換期の都市型ガストロノミーの発達、家族の食卓から個食の時代への移行についての考察に続き、両世界大戦間という時代をとりあげた。第一次大戦後第二次大戦前、いわゆる黄金の20年代において、都市は、荒廃と再生のエネルギーの中で大きな発達を遂げる。大都市小説というジャンルが生まれたのもこの時代である。本研究では大都市小説の代表作といわれるアルフレート・デブリーンの『ベルリン・アレクサンダー広場』を中心に分析した。犯罪小説の代表ともいわれるこの作品では、表現主義の手法を踏まえ、非常に複雑かつ巧妙なかたちで、飲食事象のなかに、社会・道徳問題を取り込んでいる。今まで注目されていなかったこの点を論文にまとめた。その後さらにこれを発展させ、飲食モチーフ、聖書引用に関してのドストエフスキーの犯罪小説『カラマーゾフの兄弟』との共通点、都市をひとつの生物としてみるという観点から取り入れた都市オートポイエーシス論を加え、21年度5月ドイツで発表を行った。20年代は本研究にとって非常に重要な時代であったので、さらにヴィッキー・バウム『グランド・ホテル』、イルムガルト・コイン『人工シルクの女』などを取り上げた。

とりわけ、学術的に論じられることが少ないコインの作品については再評価の必要性を訴えるに値する発見が多々あった。作品は20年代らしい都市の華やかなりしい生活スタイルの可能性を提唱しつつも、1929年世界大恐慌の到来にみえる景気の後退を暗示しており、その二極間で揺れる不安定さが、現代のツイッター的表現形式において展開され

ている。当時の表現主義諸作品と比しても、表現技法において極めて先駆的なコインの作品は、迅速性と簡易性を重視の新しい食スタイルがはらむ危うさを、まさにその文法的な危うさに載せて、人間関係の危うさを暗示しつつ巧みに表現している。このような考察を加え、現在、デブリーンの『ベルリン・アレクサンダー広場』を中心に据えた論文を作成中である。ほぼ執筆を終えたところであるこの論文については、ドイツの学術雑誌への投稿を目指している。

第二次大戦後の復興期の時代については、最近再評価の機運も高いヴォルフガング・ケッペンの作品とともに、飲酒文学ともいわれるアルノー・シュミッツを主に取り上げた。両者とも食のシーンが多く、食べ物や消化に関する比喩が重要な場面で登場しているのが特徴的であるが、戦後復興期の精神的なりハビリテーション過程を真正面から捉える前者に対し、後者は側面から時に陶然と、精神的な距離感をもって眺めている。全体的な再構築と選択的消化による変容という対照性がそこにはみられるのだが、後者が内包する一種のシニシズム、独自の摂生というモティーフがその後の現代文学にどう継承されていくのか、グローバル化の洗礼を受け常に刷新される都市型生活を題材にした文学テクストの中で、どのように変容するのか考察の展望が開かれる。

これら三つの時代を通時的に考察するにあたり、理論的な基本ベクトルが必要であった。社会学系の都市論、建築論をふまえつつ、重要と思われたのはFischer-Lichteを筆頭にドイツ語圏における美的パフォーマンス論および現代美術と演劇から提唱される演出論であった。そして、ルーマンのシステム理論の終焉が取りざたされる現在ではあるが、その思想的出発点を提供したオートポイエーシス理論そのものにはまだ有効性があると思われる。ヨーロッパの芸術・美学論争における「視覚」重視への反証としても、またカントに見られる触覚・味覚への興味を通じて、滋養吸収する身体としての自律的都市身体論を主張することはできると思われる。

なお、広範囲な考察対象を有する本研究課題は、ドイツのアレクサンダー・フォン・フンボルト財団の研究奨学金により継続されることとなった。また、研究成果の発表、社会への還元として、まず平成23年日本における単著図書出版をめどに計画、執筆に取りかかっている。その際内容は19世紀後半世紀末から二次大戦勃発までの時代を扱うものとする。(出版社未定)。その後、平成22年度以降の成果も踏まえ、平成24年ドイツに

において単著図書を出版することを予定している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

- ① 柏木貴久子、Nahrungsrituale in der Großstadt - Alfred Döblins *Berlin Alexanderplatz*、『独逸文学』54巻、査読有、2010、95~121
- ② 柏木貴久子、Die Großstadt als alkohosiertes Schlachtfeld in Alfred Döblins *Berlin Alexanderplatz*、『独逸文学』53巻、査読有、2009、29-43
- ③ 柏木貴久子、Urbaner Geschmack bei Thomas Manns *Buddenbrooks* und *Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull*、『独逸文学』52巻、査読有、2008、51~65

[学会発表] (計 2件)

- ① 柏木貴久子、Nahrungsrituale in der Großstadt - Alfred Döblins *Berlin Alexanderplatz*、ボン大学ドイツ文学文化学部主催「文化とメディア」、2009年5月8日、於ボン大学
- ② 柏木貴久子、Nahrungsrituale in der Großstadt、ボン大学ドイツ文学文化学部主催「文化とメディア」、2007年5月25日、

於ボン大学

[図書] (計 1件)

柏木貴久子・松尾誠之・末永豊、三修社、南ドイツの川と町 - イーザル、イン、ドナウ、ネッカーへ、2009、358(11-37)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柏木 貴久子

(関西大学・外国語学部・准教授)

研究者番号 : 70411494